

参考資料

「病害虫・雑草防除基準」平成11年3月版を平成13年3月現在で修正し一部抜粋

1. 稲の病害虫 ○種もみ消毒

病害虫名	防 除 法	注 意 事 項																		
いもち病 Pyricularia ばか苗病 Gibberella ごま葉枯病 Cochliobolus	<p>・種子消毒の手順 途中2～3回攪拌</p> <p>塩水選 → 水洗 → 水切り → 消毒又は粉衣 →</p> <p>(使用する薬剤に応じて)</p> <p>風乾 → 浸種 (5～6日 積算水温100°C) → 催芽 (30°Cで1晩 催芽長0.5mm) → 播種</p> <p>1 薬剤浸漬</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ベンレートT水和剤20 <ul style="list-style-type: none"> 20倍・10分 200倍・48～72時間浸漬 浸種前/1 スポルタック乳剤 <ul style="list-style-type: none"> 100倍・10分間 1000倍・24時間浸漬 浸種前/1 スポルタックスターナフロアブルSE <ul style="list-style-type: none"> 20倍・10分間 200倍・24時間浸漬 浸種前/1 テクリード乳剤 <ul style="list-style-type: none"> 500倍・24時間 浸種前/1 テクリード水和剤・Cフロアブル <ul style="list-style-type: none"> 20倍・10分間 200倍・24時間浸漬 浸種前/1 トリフミン乳剤・水和剤 <ul style="list-style-type: none"> 30倍・10分間 300倍・24時間浸漬 浸種前/1 トリフミンスターナSE(いもち病) <ul style="list-style-type: none"> 20倍・10分 浸種前/1 ヘルシード乳剤・水和剤 <ul style="list-style-type: none"> 20倍・10分間 200倍・24時間浸漬 浸種前/1 ●ヘルシードTフロアブル <ul style="list-style-type: none"> 200倍・24時間浸漬 浸種前/1 ヘルシードスターナ水和剤 <ul style="list-style-type: none"> 20倍・10分間(いもち病) 200倍・24時間浸漬 浸種前/1 モミガードC水和剤 <ul style="list-style-type: none"> 200倍・24時間浸漬 ウイスベクト水和剤5 <ul style="list-style-type: none"> 200400倍・24時間 浸種前/1 ヨネボン <ul style="list-style-type: none"> 50倍・24時間、20倍・10分浸種前/1 	<p>耕種的対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病等種子伝染性病害の発生圃場及びその周辺圃場からは採種しない。 ・塩水選とその後の水洗は必ず実施し、浸種は清水(水道水、深井戸水)で行う。 <p>・*塩水選における比重と食塩、硫酸の量(/水10t)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>種類</th> <th>比重</th> <th>食塩</th> <th>硫酸</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>うるち種</td> <td>1.13</td> <td>1.9kg</td> <td>2.5kg</td> </tr> <tr> <td>もち種</td> <td>1.08</td> <td>1.1</td> <td>1.4</td> </tr> </tbody> </table> <p>注) 食塩、硫酸は吸湿しないときの重量</p> <ul style="list-style-type: none"> ・種子消毒の薬液ともみの容量比は1：1とする。 ・薬液温度は20°Cで行い、10°C以下の時は行わない(ビニールハウス内で消毒するなど保温処理を行うか湿粉衣とする) ・種もみを袋詰めして消毒する時は、目の荒いサラシ網等を使用し、吸水してもいっぱいにならないように、もみ量を加減する。また、浸漬中2～3回は攪拌する。 ・消毒後の浸種は、薬剤を種もみから落とさないよう停滞水で行う。 ・浸種の浴比は1：2以上とし水の交換は原則として行わない。但し、雑菌の繁殖等により水の汚れ異臭を発生した場合20°C以上の高温で酸素不足が心配されるときは静かに交換する。 <p>種子：水を1：2にするには</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>種子(kg)</th> <th>水(l)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4</td> <td>15</td> </tr> <tr> <td>20</td> <td>75</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・高濃度浸漬処理及び粉衣処理した種子は浸漬後ゆすぎ落として催芽させ、播種する。 ・スポルタック乳剤、トリフミン乳剤、ヘルシード剤は薬液処理後の風乾作業が省略できるが、ベンレートT、トリフミン各水和剤はできない。 ・テクリードCFLはチウラム剤との混用を避ける。また、亜鉛容器を使用しない。 ・EBI剤は一般に初期生育遅延を引き起こす。また、乾燥によって根上りを起こしやすくなるので覆土及び播種直後～出芽後の灌水をしっかり行う 	種類	比重	食塩	硫酸	うるち種	1.13	1.9kg	2.5kg	もち種	1.08	1.1	1.4	種子(kg)	水(l)	4	15	20	75
種類	比重	食塩	硫酸																	
うるち種	1.13	1.9kg	2.5kg																	
もち種	1.08	1.1	1.4																	
種子(kg)	水(l)																			
4	15																			
20	75																			

病害虫名	防 除 法	注 意 事 項
いもち病 ばか苗病 ごま葉枯病 (続 き)	<p>2 湿粉衣 使用回数はいずれも浸種前/1 ウイスベクト水和剤5 乾籾重量の 0.5% ウイスベクト水和剤 //</p>	<ul style="list-style-type: none"> 湿粉衣は塩水選後、よく水洗し、水切りはもみを握って離れたときに手に付かない程度がよい。また、薬剤は均一に付着させた後、日陰で十分乾燥する。 粉衣したもみ量の2倍の水で浸種し、24時間は水を取り替えず攪拌しない。 「吹付け種子の取り扱い」 種子と水の容積比は1:2とし、5日間浸種、停滞水中で2~3日維持する。水は原則として取り替えない。但し、高温、細菌が異常繁殖し酸素欠乏により発芽不良が予測される場合、静かに取り替える。河川やため池などでの浸種は絶対にしない。吹き付け種子と無消毒種子を混ぜて浸種しても効果はない。また、食用に供しない。
もみ枯細菌病 Burkuholderia 苗立枯細菌病 Burkuholderia 褐条病 Acidovorax (細菌)	<p>1 薬液浸漬 スターナ水和剤 (褐条病含む) 20倍・10分間 200倍・5~24時間 400~800倍・24時間浸漬 浸種前/1 ヨネボン 20倍~30倍液・10分間 100倍・24時間 浸種前/1 ●ヘルシードTフロアブル 20倍・10分浸 浸種前/1 200倍・24時間浸漬 浸種前/1</p> <p>2 湿粉衣 スターナ水和剤 乾籾重量の0.3~0.5% 浸種前/1 スポルタックスターナSE 乾籾重量の1kg当たり 7.5倍液 30ml テクリード水和剤・Cフロアブル 乾籾重量の0.5% 浸種前/1</p> <p>3 吹付け・塗沫処理 ヘルシードスターナフロアブル 浸種前/1 乾籾重量の1kg当たり 7.5倍液 30ml ●ヘルシードTフロアブル 乾籾重量の1kg当たり 7.5倍液 30ml モミガードC水和剤 乾籾重量の1kg当たり 7.5倍液 30ml</p>	<ul style="list-style-type: none"> スターナは他のばか苗病等を対象とした消毒剤と混用可能である。 長時間浸漬の場合は、浸漬処理中に1~2回攪拌する。 吹付け種子で4種混合消毒をする場合、浸種と消毒を併用しスターナ剤800倍72時間浸漬を併用する。 例: ヘルシードTフロアブル+スポルタック水和剤吹き付け処理種子を、スターナ水和剤800倍72時間浸漬。 吹付け種子は浸種から開始し、積算温度100°C程度とする。 「注意」 消毒廃液処理による環境汚染を防止(濃度は慣行の10分の1になる)するためできるだけ吹付け種子を利用する。廃液は水路や河川へ流さない。
イネシンガレ センチュウ	<p>1 温湯消毒 乾燥籾を57~58°Cの温湯に15分間浸して消毒し、引き上げた後直ちに冷水に浸する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> イネシンガレセンチュウは黒点米(目黒米ともいう)の原因となり、米の品質を著しく害する。 イネシンガレセンチュウは、大部分が種子のもみ殻内部に生息し、種子伝染率が高い。汚染苗によ

病害虫名	防 除 法	注 意 事 項								
イネシンガレ センチュウ (続 き)	2 薬剤消毒 1) 薬液浸漬 スミチオン乳剤(50%) 1000倍・6～72時間浸漬 播種前 バイジット乳剤(50%) 1000倍・6～24時間浸漬 播種前 ●★パダンSG水溶剤 3000倍・24時間浸漬 浸種前 2) 湿粉衣 バイジット粉剤2 播種時-2 種子重量の5～10%湿粉衣 3) 吹き付け・塗沫処理 スミチオン乳剤(50%) 播種前 100倍・種子重量の3%	伝染もあるので注意する。 ・各種子消毒剤と混合し、同時消毒できる。 ・センチュウは薬液浸漬中にもみ外へ遊出し、薬剤の効果により死滅する。 ・スミチオン剤は、EBI剤との混用により分解が促進されるので、長期間保存した種子は使用しない。 農産物検査規格規定(着色粒の混入限度・玄米)								
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>1 等</th> <th>2 等</th> <th>3 等</th> <th>等 外</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0.1%</td> <td>0.3%</td> <td>0.7%</td> <td>5.0%</td> </tr> </tbody> </table>	1 等	2 等	3 等	等 外	0.1%	0.3%	0.7%	5.0%
1 等	2 等	3 等	等 外							
0.1%	0.3%	0.7%	5.0%							
		注) 混入限度は最高限度%は全量に対する重量比								
苗立枯病菌 リゾプス トリコデルマ フザリウム ピシウム	●ベンレートT水和剤20 浸種前/1 種子浸漬 20倍 種子粉衣 0.5～1% 塗沫処理 7.5倍30ml/kg 3.75倍30ml/kg	・変色米を引き起こす病原菌にも効果がある。 いもち病・ごま葉枯病 籾枯細菌病								
リゾプス菌 トリコデルマ菌	テクリード乳剤・水和剤 浸種前/1 種子浸漬 20倍・10分 200倍・24時間 種子粉衣 0.5% 塗沫処理 7.5倍 30ml/kg ●ヘルシードTフロアブル 浸種前/1 種子浸漬 20倍・10分 種子吹き付け処理又は塗沫処理 7.5倍 30ml/kg									
リゾプス菌 トリコデルマ菌	テクリードCフロアブル 吹付・塗沫処理 4倍・20ml/kg 原液・5ml/kg									

○温湯浸漬処理による種子消毒等

60℃-10分間または65℃-5分間により籾枯細菌病、線虫に対し薬剤処理とほぼ同等の効果を得ることができる。消毒後は直ちに冷却する。(超酸性水による消毒では病害に対する効果は認められるが、線虫に対する効果がないので留意する。)

○イネ主要品種のいもち病抵抗性

品 種	抵抗性 遺伝子	圃場抵抗性		品 種	抵抗性 遺伝子	圃場抵抗性	
		葉いもち	穂いもち			葉いもち	穂いもち
ひとめぼれ	pi-i	m	s	フクヒカリ	pi-z	s	-
あきたこまち	pi-a pi-i	m	s	ひだほまれ	pi-a, k*	s	-
ササニシキ	pi-a	ss	ss	たかやまもち	+	r	-
コシヒカリ	+	s	m	ひだみのり	?	s	-
ハツシモ	pi-a	s	m	ココノエモチ	pi-a	s	-
日本晴	pi-a, +	mr	mr	ヤマヒカリ	pi-ta ²	m	-
初星	pi-i	mr~m	-				

○育苗箱施用剤

育苗箱に用いることができる薬剤

薬剤名	使用基準		いもち病	紋枯病	ごま葉枯病	白葉枯病	粉枯細菌病	ウンカ類	ヒメトビウンカ	セジロウンカ	ツマグロヨコバイ	ニカメイチュウ	コブノメイガ	イチモンジセセリ	フタオビコヤガ	イネドロオイムシ	イネゾウムシ	イネミスゾウムシ	イナゴ類	ハモグリバエ	心枯線虫	スクミリンゴガイ	備考
	処理量 g/箱	処理時期 -回数																					
アミスター [®] アリス粒剤	50	3~0-1	○	○				○				○	○	○	○	○	○	○					
アミスター [®] アトマイヤー箱	50	0-1	○	○				○										○					
リゼ [®] メト粒剤	20~30	3~0-2	○	○		○	○																
Dr.リゼ [®] 箱粒剤	50	3~0-2	○	○		○	○																
Dr.リゼ [®] アリス粒剤	50	緑化期~0-2	○	○		○	○																
10.6																							
コラトップ粒剤5	60~80	2~0-1	○	○																			
コラトップ [®] デルタ粒剤	60	0-1	○	○					○	○	○					○							
フジワン粒剤	50~75	緑化期 当日-3	○	○																			むれ苗 根伸長、発根
フジワン [®] アリス粒剤	50	緑化期 当日-1	○	○									○	○	○	○	○	○					
ビーム粒剤	50~100	3~0-4	○	○																			
ビーム [®] アトマイヤー粒剤	50	2~0-1	○	○																			
ビーム [®] アリス粒剤	50	3~0-1	○	○																			イネザミウマ
グレート箱粒剤	50	0-1		○																			
リバー箱粒剤	50	3~0-1		○																			
バイオ粒剤2	50~75	3~0-1	○	○																			
ウイン箱粒剤	50	緑化期 当日-2	○	○																			
ウイン [®] アトマイヤー箱粒剤	50	2~0-2	○	○																			
アトマイヤー箱粒剤	50~80	2~0-3							○							○	○	○	○				イネザミウマ
コマート粒剤	50~100	0-2							○							○	○	○	○				
コマート粒剤6	75~100	3~0-2							○							○	○	○	○				
オンコル粒剤5	50~80	3~0-1							○	○	○					○	○	○	○				
オンコルリバー箱粒剤	50	3~1-1		○												○	○	○	○				
ガゼット粒剤	50~70	3~0-1							○							○	○	○	○				
ガゼット [®] アリス粒剤	50	3~1-1							○							○	○	○	○				
カヤフォス粒剤	60~100	3~0-1							○	○	○					○	○	○	○				クロカバハエ
ガンダム粒剤	50	3~0-1							○	○	○					○	○	○	○				
ギャング粒剤	50	3~0-1							○	○	○					○	○	○	○				
ササイト [®] 粒剤(3%)	50~100	0-5							○	○	○					○	○	○	○				
ジャッジ箱粒剤	50	3~0-1	○													○	○	○	○				
ダイジノ粒剤3	150~200	0-4							○							○	○	○	○				
チェス粒剤	50	3~0-1							○							○	○	○	○				
テツワン粒剤	50~80	1~0-1							○							○	○	○	○				
デルタネット粒剤	40~60	3~0-1							○	○	○					○	○	○	○				
トレボン粒剤	70	3~0-1														○	○	○	○				
バダン粒剤4	50~100	0-1														○	○	○	○				
アリス箱粒剤	50	3~0-1		○					○							○	○	○	○				
アリス粒剤	50	緑化期 当日-1							○							○	○	○	○				

育苗箱施用上の注意事項

- 育苗箱の上から均一に散布し、茎葉に付着した薬剤を払い落とし、軽く散水した後田植機にかけ移植する。
- 不均一な場合、本田中で発病株、茎葉被害が水田内に見られることになる。
- 苗の葉が濡れていると、薬剤が付着して薬害を生ずることがあるので、処理直前の灌水はしないよう管理する。
- 軟弱徒長苗、むれ苗、移植期を過ぎた根の活力が衰えた苗等には薬害を生ずるので、薬剤処理はしない。これに
- よつて葉害を生じる苗事例を認められる。じやすいので、代かきは丁寧に行い、移植後は田面が露出したりしない
- よつて田の整理が不均一の場合は薬害を生ずるので、代かきは丁寧に行い、移植後は田面が露出したりしない
- よつて田の管理する。移植後は灌水状態を保ち、苗が活着するまで(概ね4日)田面が露出しないようにする。
- よつて田が砂質土壌、漏水田、未熟有機物多量田の場合は育苗箱施用はしない。
- 使用量・時期は厳守しない。
- 箱育苗では密植、高温、多湿条件により発病しやすいので注意する。心配されるときは薬剤散布後移植する。
- 箱施用は殺虫剤との混合剤使用が効率的である。

○育苗期及び本田の病害虫

病害虫名	防 除 法	農業適正 使用基準	注 意 事 項																								
いもち病 Pyricularia (不完全菌類)	<p>耕種・耐病性品種を栽培する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 窒素質肥料の偏用を避ける。 レンゲなどの緑肥は田植の30~35日前にすき込み、基肥窒素は施用しない。 冷水の流入、かけ流しをしない。 けい酸質肥料、堆きゆう肥等により地力の維持増進をはかる。 被害わらや籾がらは重要な伝染源となるので、育苗地周辺には持ち込まない。 機械移植における予備苗は、重要な伝染源となるので早期に取り除く。 <p>薬剤・種籾消毒32~33頁参照</p> <ul style="list-style-type: none"> 育苗箱施用薬剤 前記一覧表からいずれかの薬剤を選択し育苗箱中の苗の上から均一に散布する 田植機側条施用^(注) <ul style="list-style-type: none"> 側条オリゼメート粒剤 3kg/10a 側条リゼメート顆粒水和剤 500g/10a 高精度発生予察情報を参考に、次のいずれかの薬剤を散布又は水面施用する。また、地上少量散布剤については前記表を参考に薬剤を選定する。 <ul style="list-style-type: none"> アチーブ粉剤DL 3~4kg/10a ※ 粒剤9 3kg/10a フロアブル 2,000倍 ※オリゼメート粒剤 (1~1.3kg/10a) <ul style="list-style-type: none"> バック 20~26個/10a フジワン粉剤DL、乳剤 1,000倍 ※ 粒剤・1粒粒剤 <ul style="list-style-type: none"> キタジンP粉剤30DL、同乳剤 1,000倍 ※ 粒剤 <ul style="list-style-type: none"> ※コラトップ粒剤5 ※ 1粒粒剤 1~1.5kg/10a バック 12個/10a ※オリブライト1粒粒剤 バック 20個/10a ウインフロアブル 1,500倍 粉剤DL 3~4kg/10a ヒノザン粉剤DL、乳剤30 1,000倍 ビーム粉剤5DL、水和剤 4,000倍 カスミン粉剤DL、液剤 1,000倍 液剤 育苗箱4~8倍 50ml/箱 カスラブサイド粉剤3DL 水和剤 1,000倍 ※デラウス粉剤 3~4kg/10a 7077 1,000~1,500倍 	<p>時期回数</p> <p>移植時-1 移植時-1</p> <p>1 4-3 2 1-3 1 4-3 ※-2 ※-2 14-3 ※-3 21-4 ※-4 ※-3 ※-3 10~20 -3 60-1 ※-1 21-2 21-3 7-3 14-5 21-5 21-5 14-2 14-2</p>	<p>いもち病菌の菌系統群の変化により品種の抵抗性が著しく左右されることがあるので注意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 箱育苗では密植、高温、多湿条件により発病しやすいので注意する。発病が心配されるときは薬剤散布後移植する。 分けつ期が低温のときは、「おそでき」となり、穂いもちの発生が多くなるので穂肥の施用法に注意する。 育苗箱は30×60×3cmが基本で、土の重量は概ね5kg/箱程度である 注) 側条施用はP-スト肥料に混合し側条施肥田植機を用いて移植時施用。 <p>※粒剤使用時期と施用法</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>剤 名</th> <th>葉いもち (初発前)</th> <th>穂いもち (出穂期)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>7777 粉剤9</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>キタジンP</td> <td>0~7日</td> <td>7~20日</td> </tr> <tr> <td>コラトップ</td> <td>0~10日</td> <td>5~30日</td> </tr> <tr> <td>デラウス粒剤</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>フジワン</td> <td>7~10日</td> <td>10~30日</td> </tr> <tr> <td>オリゼメート</td> <td>7~10日</td> <td>3~4週間</td> </tr> <tr> <td>オリブライト</td> <td>10~10日</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table> <p>施用時は水深3cm前後で2~3日湛水する。なお、漏水田では使用しない</p> <ul style="list-style-type: none"> 粒剤、粉剤は3~4kg/10a使用。但し、1粒粒剤は1kg施用とする。 粒剤は効果発現までに時間を要し、速効的な効果はないので、必ず予防剤として使用する。多発時には治療効果の高い散布薬剤と併用する。 バック剤は水深3~5cmとし5日間程度維持、落水、掛け流しはしない。砂質土では使用を避ける。 ウインフロアブルはピーマンに葉害を生ずる。 オリブライトは漏水田で激しい葉害を生じた例がある。 ビーム剤は野菜類の幼苗、青なし(二十世紀等)に葉害を生ずる恐れがあるのでかからないよう注意する。 カスミン微量又は少量散布は大豆に葉害を生じやすいので注意する。 	剤 名	葉いもち (初発前)	穂いもち (出穂期)	7777 粉剤9			キタジンP	0~7日	7~20日	コラトップ	0~10日	5~30日	デラウス粒剤			フジワン	7~10日	10~30日	オリゼメート	7~10日	3~4週間	オリブライト	10~10日	-
剤 名	葉いもち (初発前)	穂いもち (出穂期)																									
7777 粉剤9																											
キタジンP	0~7日	7~20日																									
コラトップ	0~10日	5~30日																									
デラウス粒剤																											
フジワン	7~10日	10~30日																									
オリゼメート	7~10日	3~4週間																									
オリブライト	10~10日	-																									

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
いもち病 (続 き)	ノンプラス707アール 粉剤DL 1,000倍 3~4kg ブラシン粉剤DL 水和剤 1,000倍 ブラエス乳剤 1,000倍 ラブサイド水和剤 1,000~1,500倍	21-5 21-2 21-2 30-2 21-5 21-4	・カスミン液剤箱施薬は、覆土前、は種籾の上から均一に散布する。 ・ブラシン剤は変色米防除にも有効である。 ・ブラエス剤は目に入らないようにする。また、ナス科作物は葉害を生じ易いので、かからないようにする。 ・フジワン剤は登熟向上効果がある。
紋枯病 Rhizoctonia (担子菌類)	耕種・窒素質肥料の過施用を避け、なるべく浅水管理とする。 薬剤・上位進展阻止を目標に幼穂形成期重点に散布する(出穂前30~10日)。	10a	・28~30℃で、降雨が伴うと発病が多い。 ・この病菌は多犯性で、水路や畦畔の雑草にも感染するので雑草を刈取る
疑似紋枯病	アミスター粒剤15	4kg	出穂II-II-I
褐色菌核病	粉剤DL	4kg	出穂II-3
褐色紋枯病	グレートム粒剤*	3~4kg	45-1
赤色菌核病	★バシタック粉剤DL	3~4kg	14-3
	水和剤	1,000~1,500倍	
	バリダシン粉剤DL、微粒剤F	3~4kg	14--
	液剤5	1,000倍	14--
	★モンカット水和剤*	1,000倍	14-3
	ファイン粉剤20*	3~4kg	14-3
	粒剤	3~4kg	45-3
	1kg粒剤 [†]	4kg	出穂II-II-I
	707アール	1,000~1,500倍	14-3
	サーフ	0.7~1ℓ/10a	出穂35~15-I
	★アオモンカット(パック剤)	20個/10a	出穂30~10-I
	モンガード粉剤DL*	3~4kg	14-3
	水和剤*	1,000~1,500倍	14-3
	モンセレン粉剤DL	3~4kg	21-4
	水和剤	1,500~2,000倍	21-4
	707アール	1,500倍	21-4
	リンバー粒剤*	3~4kg	30-2
	粉剤DL		21-2
	水和剤	1,500~3,000倍	45-2
			出穂前7~20 -4 21-3 出穂前10~30 -3
小粒菌核病 Magnaporthe (子のう菌類)	耕種・カリ肥料の増肥、ケイ酸質資材の施用等を行う。 ・分けつ期には浅水管理とし、早期落水を避ける。 薬剤 キタジンP粒剤 3~5kg/10a ヒノザン粉剤25DL、乳剤 1,000倍 フジワン粒剤 4~5kg/10a		・水温が20℃以上になると感染が始まり、高温多湿時に被害が大きい。 ・株元に薬剤がかかるよう散布する。 ・穂いもちと同時防除する。 ・フジワン粒剤は登熟向上効果がある
白葉枯病 Xanthomonas (細菌)	耕種・抵抗性品種を栽培する。 ・冬の間に畦畔、水路の雑草を燃却し水路の整備(雑草の除去)を行う。 ・窒素質肥料の多用を避け、発病後の追肥は病勢を進展させるのでひかえる。		・病菌は水路などに自生するサヤヌカグサで越冬する。 ・朝夕の露がある時は発病田に入らないよう注意する。

病虫害名	防 除 法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
白葉枯病 (続 き)	薬剤・育苗箱施肥(均一散布) /箱 オリゼメート粒剤 20~30g Dr.オリゼ箱粒剤 50g ・発病初期に1~2回散布 /10a シラハゲン粉剤S 3~4kg ・出穂3~4週間前に散布 /10a オリゼメート粒剤 3~4kg 1kg粒剤 1kg	穂3~1 -2 穂3~0 -2 14-3 出穂3~4 週前-2	・ 抵抗性 中強：J3カ、月の光 中：キカカ 弱：ひとめぼれ ・浸冠水や、台風直後にも散布する。 ・出穂後の散布は薬害を生じやすいので避ける。
ごま葉枯病 (穂枯れ) Cochlio- bolus	耕種・深耕、堆きゅう肥等の施用により地力の改善をはかる。 ・硫酸根肥料の連用をさけ、窒素質肥料の分施、固型肥料、暖効性肥料、ケイ酸苦土肥料の施用、カリ肥料の増施等を行う。 薬剤・種初消毒32~33頁参照 ・常発地あるいは多発時には出穂期~傾穂期に2回散布 /10a ビームジン粉剤5DL 4kg ヒノザン粉剤25DL 3~4kg 乳剤30 1,000倍 ノンプラス7077β 1,000倍 ラブサイドベフラン粉剤DL 3~4kg ブラシン粉剤DL 3~4kg 水和剤 1,000倍	7-3 21-3 21-3 21-2 穂ばらみ~穂期 (30-4) 21-2 30-2	・根腐れ防止のため適宜排水を行う。 ・穂枯れは出穂~乳熟期の夜温が高いとき、糊熟~黄熟期に雨が多いときに発生が多い。 ・縞葉枯発病株には本病の発生が多い ・穂枯れは、ごま葉枯病その他の病害によって起こるが、出穂期の薬剤散布により被害を軽減できる。 ・有機りん系もち剤を散布すると同時防除効果が期待できる。
稲こうじ病 Claviceps (子のう菌類)	耕種・多肥による肥料の遅効きを避ける。 薬剤・出穂10日前までに次の薬剤を選択し散布する。 散粉ボルドー粉剤DL 3~4kg カミンボルドー粉剤3DL 3~4kg Zボルドー粉剤DL 3~4kg ブラシン粉剤DL 4kg 7077β 1,000倍 ラブサイドベフラン粉剤DL 3~4kg	出穂前10-- 出穂前10-5 出穂前10-- 21-2 21-2 穂ばらみ~穂期 (30-4)	・銅剤は出穂期以降薬害が発生するので、出穂前10日以降の散布はしない。 ・多発地域では出穂前は銅剤、出穂後は銅剤以外の薬剤による体系防除を行う。 ・ラブサイドベフランは、穂もち、穂枯れにも効果がある。
黄化萎縮病 Sclero- phthora (べん毛菌類)	耕種・常発地では畑苗代又は箱育苗とする。 ・育苗床では冠水のおそれのない地を選び上げ床作りとし、発芽期に直接水をかぶらないようにする(芽が5mm以上となるまで)。 ・分けつ初期は、なるべく浅水とし、水の移動を避けて水温を高める。 薬剤・常発地では移植2~3週間後に散布 リドミル粒剤2 6kg/10a	90-2	・本病菌は水媒伝染する。 ・苗代では、播種後3~5日の出芽期本田では田植後分けつ茎の出芽期に感染するので、この時期の水管理に注意する。 ・リドミル剤はイネ疫病にも効果を示す。
しま葉枯病・ くろすじ萎縮 病、(ウハス) ヒメビウカ媒介	耕種・5月中~下旬植を避ける。 ・抵抗性品種を栽培する。 ・秋冬耕起を行い、水田雑草でのヒメトビウカ越冬量を抑える。		・5月中旬~6月上旬植に多発する。 ・麦類(特に小麦)にはヒメトビウカ第1世代幼虫が多発し水田への大きな発生源となるのでほ場周辺雑草

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
しま葉枯病・ くろすじ萎縮 病、(ウズ)	・畦畔雑草を焼却する。 ・休耕田は耕起するか除草剤を散布するな ど雑草の管理に努める。 薬剤・媒介虫であるヒメトビウンカの防除を徹 底する(ヒメトビウンカの項参照)		を含めて麦畑での防除を徹底する。 多発する地域は麦の病虫害の項参照 ・湛水土壌中直播栽培では発生が多く なるので防除を徹底する。
萎縮病 (ウイルス)	薬剤・本病を媒介するツマグロヨコバイ、イナ ヅマヨコバイ防除のため、苗代から本田 初期にかけて薬剤散布する(ツマグロヨ コバイ44頁参照)。		・ツマグロヨコバイの生息場所は雑草 地、畦畔など広域にわたるので、薬 剤の広域一斉防除の効果が高い。 ・田植前に畦畔防除を併せて行うと効 果が高い。 ・湛水土壌中直播栽培では発生が多く なるので防除を徹底する。 ・苗の感染も起こるので、育苗期にも 防除を行う。 ・発生が多いときは第2世代幼虫(7 月初期)防除も行う(体系防除)。
苗立枯病 ※ムレ苗 Fusarium Phoma (不完全菌類) Pythium (べん毛菌類)	耕種・被覆苗代では、温度管理に注意する ・箱育苗では無病土を使用する。 薬剤・土壌病害虫 296頁参照 [土壌混和] /箱 タチガレース粉剤 6~8g カヤベスト10粉剤 6~10g [灌 注] /箱 タチガレース液剤 500~1000倍 500cc ロブラール水和剤 500培	播種前-1 播種前-1 播種直後又は発芽 後 -1 播種時-3	・土壌の乾湿及び温度変化の激しい時 に発生しやすい。 ・育苗箱の置床にも所定量を施用し消 毒しておく。 ※ムレ苗防止には箱当たりフジワン粒 剤 25~50g、ピーエー液剤 1,500~ 3,000倍 50mlの緑化始期~緑化中(1~1.5期)施用も効果がある。 ・カヤベストはみのる式育苗箱には使 用しない(薬害)。また乾燥条件で 根上がり易いので注意する
リゾープスに よる苗立枯病 (くものすか び) Rizopus (接合菌類)	耕種・育苗用土は無病のものを使用する。 ・育苗管理中の温湿度管理を適正にする。 ・過灌水(過湿)をさける。 薬剤 [土壌混和] /箱 ●ダコニール粉剤 15~20g [灌 注] /箱 ●ダコニール1000 500~1,000倍 500cc	播種前-1 播種時-1	・特に高温(35℃前後)で多湿の場合 発生しやすいので、それ以下の温度 で管理する。 ・育苗箱、育苗施設の消毒 (土詰め前) ベンレート水和剤 200倍 ケミクロンG 500~1,000倍 イチバン(TCMTB剤) 500~1,000倍
トリコデルマ による苗立枯 病 Tricoderma (不完全菌類)	薬剤 [播種時灌注] /箱 ベンレート水和剤 500~1,000倍 500cc [土壌混和] /箱 カヤベスト10粉剤* 6~10g(播種前-1) フタバロン粉剤* 10~15g(播種前-1) *薬害の発生に注意する。		○ 病原種類等と防除薬剤
Rhizoctonia・ Sclerotiumに よる苗立枯病 (担子菌類)	薬剤 [播種時~発病初期] バリダシン液剤 5 1,000倍 500cc		病原菌等 フピムリトリ粉発活 ザシレゾリソ枯根着 リウ苗 コク細促促 ウム ブデト菌進進 ム スルニ マ ア
細菌性の立枯 病 苗腐敗症 Pseudomonas Burkholderia	薬剤 [播種時散布・覆土前-5] /箱 カスミン液剤 4~8倍 50cc カスミン粒剤 /箱 培土混和 30g (播種前-5) 播種時散粒 15~20g (覆土前-5) 覆土混和 15~20g (覆土前-5)		好ガレース 粉 ○○○ ○○ // 液 ○○○ ○ カヤベスト 粉 ○○○○○ ○○ ダコニール 粉 ○ ○ ダコニール1000 ○ ベンレート水和 ○ ○ ダコレート水和 ○ ○○ バリダシン 液 ○ ○ ○ フタバロン 粉 ○○ ○○ ○ カスミン 液・粒 ○ ○ ○ ロブラール 水 ○ ○○ フジワン粒剤 ○

病虫害名	防 除 法	農業適正 使用基準	注 意 事 項
もみ枯細菌病 Bburkhol- deria Pseudomonas (細菌)	<p>耕種・無病の圃場から種子を採種する。 ・塩水選等により選種を徹底する。 ・種子もみ消毒33頁参照</p> <p>薬剤・穂ばらみ期(出穂10日前まで)に次の薬剤を散布する。 /10a カスラブサイド粉剤3DL 3~4kg スターナ粉剤 4kg 水和剤 1,000倍 ブラシン粉剤DL 4kg</p> <p>・出穂3~4週間前に散布 /10a オリゼメート粒剤 3~5kg 1キロ粒剤 - 2</p> <p>・出穂30日前~5日前に散布 /10a コラトップ粒剤5 4kg サンケル粉剤6 3~4.5kg</p>	21-5 21-2 21-2 21-2 出穂3~4週間前 - 2 出穂5~30日前 - 4 14-4	・箱育苗では発生が多くなる。 ・塩水選後は必ず種子消毒する。 ・出穂開花期が高温で雨が多いと発病が多い。 ・緑化期の湛水処理、プール育苗で発病を抑制できる。 ・スターナは細菌病のみに有効、散布にあたってはいもち病防除剤等との混合剤を利用する。
内穎褐変病 Erwinia (細菌)	<p>薬剤・穂ばらみ期~出穂初期に散布 /10a カスラブサイド粉剤3DL 3~4kg スターナ粉剤DL 4kg ブラシン粉剤DL 4kg フロアブル 1,000倍</p>	21-5 21-2 21-2 21-2	・病原菌は雑草等に常在するので、畦畔雑草を刈り取る。 ・初期は初の内穎だけが褐変するが被害がひどい場合、外穎も変色し、茶米、死米の原因となる。
変色米 Alternaria Curvularia Epicoccum (不完全菌類)	<p>耕種・刈草を水田周辺に放置しない。</p> <p>薬剤・出穂前後から防除を行う。 ブラシンプロアブル 1,000倍 水和剤 1,000倍 ノンプラス粉剤DL 3~4kg 7077丸 300倍→25L ★ラブサイドベフラン粉剤DL 3~4kg</p>	21-2 21-2 21-2 21-2 30-4	・変色米の原因は多様である。茶米、紅変米、褐変米(褐点米、えび茶米)、黒変米(すす米、黒しよく米、褐色米)、目黒米、腹黒米 ・出穂前後に圃場周辺雑草を枯らさない。
イネシנגアレ センチウ (線虫)	<p>耕種・種もみは、無病の圃場から採種する。 ・もみ殻は、くん炭として使用する。 ・育苗箱をよく洗浄する。</p> <p>薬剤・種もみ消毒33~34参照 ・育苗箱施薬(田植直前施用) /箱 ●ダイアジノン粒剤(3%) 150~200g ・出穂期防除(出穂始めの時期及びその7日後の2回散布) /10a スミチオン乳剤 1,000倍 バイジット粉剤2 3~4kg 乳剤 1,000倍</p>	21-4 21-4 21-2 30-2	・箱育苗では、密植・高温のため発生が多くなる。 ・播種時及び移植時の感染率が高い。 ・出穂期に穂に移行し、黒点米(目黒米ともいう)を生ずる。 ・ハツシモは立毛中の症状が出ないので注意する(別称; 蛍いもち)。 ・線虫の加害により、分けつ数は増えるが無効茎が多くなる。登熟不良、穂長短縮・穂数減少を招く。
ニカメイチュウ (鱗翅目)	<p>耕種・若齢幼虫期に深水管理を行う。 ・茎の細い穂数型品種を栽培する。 ・収穫時低位置で刈り取る。</p> <p>薬剤・育苗箱施薬(田植直前施用) /箱 ●ダイアジノン粒剤(3%) 150~200g ●★パダン粒剤 80g~100g ●プリンス粒剤 50g ●ガゼットプリンス粒剤 50g</p>	移穂前1~0-4 移穂前 0-1 緑化期3~0-1 移穂前3~0-4	・果樹園敷き藁等が越冬源となるので注意する。 ・育苗箱施薬は軟弱徒長苗、病苗で被害が出やすいので注意する ・フェロモントラップで発生消長を把握し適期防除を行う。

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項									
ニカメイチュウ (続 き)	<p>・適期に薬剤散布＊ ●オフナック粉剤DL 3～4kg 乳剤 1,000倍 ★カルホス粉剤 3～4kg スミチオン粉剤DL、微粒剤F 3～4kg 乳剤 1世代1,000～2,000倍 2世代 800～1,000倍 ディプレックス粉剤 3～5kg 乳剤 1世代 700倍 2世代 500倍 バイジット粉剤2DL 3～4kg 粒剤 1L;2~3kg 2L;3~4kg 乳剤 1世代 1,500倍 2世代 1,000倍 マトリック粉剤DL 3～4kg/10a ●PAP粉剤3DL、微粒剤F 3～4kg 乳剤 1世代1,000～1,500倍 2世代 800～1,000倍 ランガード粉剤DL 3～4kg ガードサイド粉剤DL 3～4kg ●ダイアジノン粒剤3、微粒剤F 3～4kg 乳剤40 1世代 1,000～1,500倍 2世代 1,000倍 バイジット粉剤DL2 3～4kg ●★パダン粉剤DL 3～4kg 粒剤 3～4kg 1kg粒剤 1kg SG水溶剤 1,000～1,500倍 ★ルーバン粉剤DL 4kg アルフェート粒剤 3～4kg ★ロムダン水和剤 1,000倍 // ゾル 1,000倍 // 粉剤DL 3～4kg ■ミミックジョーカー粉剤DL 4kg ■トレボン粉剤DL 3～4kg ■トレボン粒剤 3kg ■トレボンサーフ 500cc ■なげ込みトレボン 10個</p>	<p>／10a 45-2 60-2 14-3 14-4 21-4 21-4 14-4 14-4 21-2 45-2 30-2 30-2 14-2 7-4 7-4 7-4 14-3 14-5 21-4 21-4 21-4 21-2 21-6 30-5 30-6 21-6 14-4 21-2 21-2 14-2 14-2 7-3 21-3 21-3 21-3</p>	<p>＊薬剤散布適期の巾 (発蛾最盛期後日数)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>世代</th> <th>粉・液剤</th> <th>粒・DL</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>第1世代</td> <td>15～20日</td> <td>10日</td> </tr> <tr> <td>第2世代</td> <td>発蛾最盛期 ～5日</td> <td>発蛾最盛期 ～5日</td> </tr> </tbody> </table> <p>注意) 早すぎるより遅いほうが効果が 高い</p> <p>・第一世代芯枯率7%で減収、被害株 率3～5%が要防除水準。 ・要防除水準：第一世代末期幼虫 1,500頭/10a、経済的被害許容水準 ：被害茎率15% ・水路等のマコモでも生息する。 ・粒剤は漏水田での使用を避ける。 ・バイジット剤はアブラナ科、サトイ モ、オウトウ、若葉の梨、DCPA 剤との近接散布で葉害の恐れがある (以下同じ)。 ・PAP剤は、有機りん剤、カーバメ ート剤はDCPA除草剤(スタム、 DCPA)との前後10日以内の近接 散布をしない。鱒科魚類に毒性が強 いので注意する。 ・パダンSG水溶剤を200gを移植時にベ ースト肥料に溶かし、側条施肥田植 機で移植する。 ・トレボンサーフ、なげ込み剤は移植 後20日(5葉期)以降に使用する。</p>	世代	粉・液剤	粒・DL	第1世代	15～20日	10日	第2世代	発蛾最盛期 ～5日	発蛾最盛期 ～5日
世代	粉・液剤	粒・DL										
第1世代	15～20日	10日										
第2世代	発蛾最盛期 ～5日	発蛾最盛期 ～5日										
ヒメトビウン カ (半翅目)	<p>耕種・抵抗性品種を栽培する。 薬剤・育苗箱施薬(田植直前施用) ★アドマイヤー箱粒剤 50～80g エチルチオメトン粒剤 100g ●オンコル粒剤5 50～80g ●ガゼット粒剤 50～70g カヤフォス粒剤5 60～80g ガンダム粒剤 50g ★チェス粒剤 50g ●テツワン粒剤 50～80g ●プリンス粒剤 50g</p>	<p>／箱 移植前2~0-3 移植前3~0-2 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前1~0-1 移植前3~0-1</p>	<p>・ヒメトビウンカは、しま葉枯病、く ろすじ萎縮病を媒介する。 ・広域一斉防除を行うとよい。 ・河川のイネ科雑草でも生息が多い。 ・しま葉枯病多発地域では6月上旬に 小麦等の防除を行う。粒剤を使用し ない場合、多発時には6～7月に2 回の防除が必要である。 ・アドマイヤー箱粒剤、プリンス剤を 使用した時は6月中旬の成虫防除を 省いてもよい。アドマイヤーは軟弱 徒長苗に葉害を生じることがある。</p>									

病害虫名	防 除 法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
ヒメトビウンカ(続き)	<ul style="list-style-type: none"> ・本田防除 /10a 早植; 6月中旬(第1世代成虫)と6月末(第2世代幼虫) 普通植; 7月上旬(第2世代幼虫) ★アドマイヤー1粒剤 3kg 粉剤DL 3~4kg 水和剤 2000培 アルフェート粒剤 3~4kg エチルチオメトン粒剤 4~7kg 	<ul style="list-style-type: none"> 80-3 21-3 30-3 21-2 50-2 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期持続性薬剤の箱施薬をおこなっても後期発病は抑制できない。 ・有機りん剤、カーバメート剤はDCPA剤(スタム、DCPA)、除草剤との前後10日以内の近接散布をしない。 ・粒剤は漏水田での使用を避ける。 ・粒剤は成虫に対する効果が劣るので第2世代幼虫発生期(6月末~7月初旬)に使用する。 ・経済的被害許容水準は出穂期発病株率5%とされている。要防除水準は本田初期成虫3頭/株(保毒率で異なる)とされている。 ・アプロード剤は脱皮阻害剤で成虫に対する効果がないので、成虫対象の場合混合剤を選択する。 ・なげ込み剤は強風下吹き寄せ、藻、浮き草浮遊田、活着不良稲、軟弱徒長稲で薬害を生ずることがある。 ・トレボンサーフ、なげ込み剤は移植後20日(5葉期)以降の散布とする。 ・MR、ジョーカーはアブラナ科、レタス、展葉期~落花期の梨に薬害を生ずる。ワラは家畜の飼料にしないこと。
	<ul style="list-style-type: none"> アプロード粉剤DL、水和剤; 2,000倍 フロアブル 1,000倍 粒剤 3~4kg ラクオーアプロード 20ℓ/10a ●アプロードダイアジノン粒剤 3~4kg アプロードアルフェート粒剤 3~4kg キルバール液剤 1,000~1,500倍 ★チェス粉剤 4kg 水和剤 2000培 バイジット粉剤2 3~4kg ●バッサ粉剤DL、乳剤; 1,000倍 ★ベストガード粉剤DL 3~4kg/10a ミップシン粒剤 3~4kg ■トレボン粉剤DL 3~4kg 乳剤、水和剤1,000~2,000倍 EW 1,000倍 MC 1,000~2,000倍 粒剤 3kg サーフ 500cc ■なげ込みトレボン 10個 ■MR、ジョーカー粉剤 3~4kg EW 2,000倍 粒剤 3kg ■ミックジョーカー粉剤DL 3~4kg 	<ul style="list-style-type: none"> 7-4 7-4 21-4 21-1 21-4 21-2 60-3 14-2 14-2 21-2 7-5 14-4 45-3 7-3 21-4 21-3 21-3 21-3 21-3 21-3 14-2 14-2 21-2 14-2 	
セジロウンカ(夏ウンカ)(半翅目)	<ul style="list-style-type: none"> 薬剤・ヒメトビウンカ42頁を参考にする。 発生初期(幼虫期)に防除する /10a ★アドマイヤー1粒剤 3kg 粉剤DL 3~4kg 水和剤 2000培 エチルチオメトン粒剤 4~7kg サンサイド粉剤DL 3~4kg 粒剤・水和剤;1,000倍 乳剤 500~800倍 ★チェス粉剤 4kg 水和剤 2000培 マクバール粉剤2DL 3~4kg ★NAC粉剤2 3~4kg 乳剤15 500~800倍 水和剤50 1,000~2,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 80-3 21-3 30-3 50-2 7-5 14-5 14-3 14-2 14-2 21-3 14-5 45-5 45-5 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外飛来害虫であるので、発生予察対応防除を行う。 ・幼虫が多発するのは一般に7月中旬~下旬、8月上旬~中旬頃である。 ・早期発見し、幼虫発生期に防除を徹底する。 ・株当たり虫数を調べ、5~10頭/株以上の寄生がみられるときは防除する(7月下~8月上)。 ・アドマイヤー、プリンス剤等の箱施薬により、本田の密度が低下する。 ・アプロード剤は脱皮阻害剤で成虫に対する効果がないので、成虫対象の場合混合剤を選択する。 ・トレボンサーフ、なげ込み剤は移植

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
セジロウンカ (続 ぎ)	<ul style="list-style-type: none"> ● バッサ粉剤DL 3~4kg 乳剤 1,000~2,000倍 ● オフナックバッサ粉剤DL 3~4kg アブロード粉剤DL、水和剤; 2,000倍 粒剤 3~4kg アルフェート粒剤 3~4kg ■ スチオントロン乳剤 1,000~2,000倍 ■ トレボン粉剤DL 3~4kg 乳剤、水和剤 1,000~2,000倍 EW 1,000倍 MC 2,000倍 ■ トレボン粒剤 3kg サーフ 500mg ■ なげ込みトレボン 10個 ■ MR.ジョーカー粉剤DL 4kg EW 2,000倍 粒剤 3kg 	<ul style="list-style-type: none"> 7-5 7-5 45-2 7-4 21-4 21-2 21-3 7-3 21-4 21-3 21-3 21-3 21-3 21-3 21-3 14-2 14-2 21-2 	<ul style="list-style-type: none"> 後20日(5葉期)以降の散布とする。 MR.ジョーカーはアブラナ科、レタス、展葉期~落花期の梨に葉害を生ずる。
トビロウンカ (秋ウンカ) (半翅目)	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒメトビウンカ・セジロウンカに準ずる。 ・早植栽培では8月上旬、普通植栽培では8月下旬から株元の発生に十分注意し、平均2~3頭/株の発生を見たら直ちに防除する。 ・出穂後25~30日までは吸汁により干粒重の低下などがおこるので防除の徹底をはかる。 ・長期持続型薬剤の育苗箱施薬により密度低減効果が期待できる。 ・RCヘリでは株元に薬剤がかかりにくい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・海外飛来害虫のため、発生予察対応防除を行う。 ○早期発見し、幼虫発生期に防除を徹底する。 ○株元に薬剤が十分かかるようにする。(4kg/10a)。 ・早植稲の刈取りにより晩生稲の被害が増加することがある。
ツマグロヨコバイ (半翅目)	<ul style="list-style-type: none"> 薬剤・育苗箱施薬(田植直前施用) [育苗後期~本田初期] ★アドマイヤー箱粒剤 50~80g ●★エカマート粒剤 50~80g エチルチオメトン粒剤 100g ●オンコル粒剤5 50~80g ●ガゼット粒剤 50~70g カヤフォス粒剤5 60~80g ●テツワン粒剤 50~80g ●★パダン粒剤4 50~100g 	<ul style="list-style-type: none"> 移植前2~0-3 移植前 0-2 移植前3~0-2 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前1~0-1 移植前 0-6 	<ul style="list-style-type: none"> ・ツマグロヨコバイは萎縮病、わい化病を媒介する。 ○軟弱徒長苗は葉害が生じやすいので育苗箱施薬はしない。 ・萎縮病の要防除水準は成虫8頭/10回すくい取り(保毒虫率5%)とされている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・本田施用(6月末~7月初旬) ★アドマイヤー1粒剤 3kg ●アブロードダイアジノン粒剤 3~4kg アブロードアルフェート粒剤 3~4kg アルフェート粒剤 3~4kg エチルチオメトン粒剤 4~7kg ミブシン粒剤 3~4kg ■トレボンサーフ 500cc ■なげ込みトレボン 10個 ■MR.ジョーカー粉剤DL 4kg EW 2,000倍 	<ul style="list-style-type: none"> 80-3 21-4 21-2 21-2 50-2 45-3 21-3 21-3 14-3 14-2 	<ul style="list-style-type: none"> ・有機りん剤、カーバメート剤はDCPA(スタム、DCPA)除草剤との前後10日以内の近接散布をしない ・アルフェート粒剤は抵抗性ツマグロヨコバイに効果が劣る場合があるので注意する。 ・MR.ジョーカーはアブラナ科、レタス、展葉期~落花期の梨に葉害を生ずる。 ・アブロード剤は脱皮阻害剤で成虫に対する効果がないので、成虫対象の

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
ツマグロヨコ バイ (続 ぎ)	<p>・穂の被害(吸汁害) 幼虫発生期(8月上旬)出穂前後に次の の薬剤を散布する。 /10a</p> <p>★アドマイヤー粉剤DL 3~4kg 21-3 水和剤 2,000倍 30-3</p> <p>アルフェート粒剤 3~4kg 21-2 アブロード粉剤DL、水和剤;2,000倍 7-4 粒剤 3~4kg 21-4</p> <p>●オフナックバッサ粉剤DL 3~4kg 45-2</p> <p>★チェス粉剤 4kg 14-2 水和剤 2000倍 14-2</p> <p>バイジット粉剤DL 2 3~4kg 21-2</p> <p>●バッサ粉剤DL、乳剤;1,000倍 7-5</p> <p>★ベストガード粉剤DL 3~4kg/10a 14-4 マクパール粉剤2DL 3~4kg 21-3 マラソン乳剤 2,000倍 7-5</p> <p>★NAC粉剤 2 3~4kg 14-5 乳剤15 500~800倍 45-5 水和剤50 1,000~2,000倍 45-5</p> <p>■トレボン粉剤DL 3~4kg 7-3 乳剤、水和剤1,000~2,000倍 21-4 EW 1,000倍 21-3 粒剤 3kg 21-3</p> <p>■MR. ジョーカー粉剤DL 3~4kg 14-2 粒剤 3kg 21-2</p>		<p>場合複合剤を選択する。</p> <p>・トレボンサーフ、なげ込み剤は移植 後20日(5葉期)以降の散布とする</p> <p>・粒剤は漏水田では使用を避ける。</p> <p>・なげ込み剤は強風下吹き寄せ、藻、 浮き草浮遊田、活着不良稲、軟弱徒 長稲で葉害を生ずることがある。</p> <p>・アドマイヤー水和剤は、単直水稻15' 0~200g/10a、カルパーと同時粉 衣。</p>
イネツトムシ (イモンジセリ) (鱗翅目)	<p>耕種・オモダカ等雑草を処理する。</p> <p>・休耕田等の雑草を処理する。</p> <p>薬剤・幼虫発生初期(7月下旬~8月上旬)に 散布。防除適期は年によって10日前後ず れるので注意する。</p> <p>○育苗箱施薬 /箱</p> <p>●プリンス粒剤 50g 雑草0-1 カヤフオス粒剤 60~80g 雑草3 0-1</p> <p>○本田散布 /10a</p> <p>スミチオン乳剤 1,000倍 21-4 ディブテレックス粉剤 4kg 14-4 乳剤 1,000倍 14-4</p> <p>●★パダン粉剤DL 3~4kg 21-6 粒剤 3~4kg 30-5 SG水溶剤 1,000~1,500倍 21-6</p> <p>●ランガード粉剤 3~4kg 14-3 アルフェート粒剤 3~4kg 21-2</p> <p>★オフナック粉剤 3~4kg 21-3 バイジット粉剤DL 2 3~4kg 21-2 マトリック粉剤DL 4kg 14-2</p> <p>★ロムダン水和剤、ゾル 1,000倍 21-2 粉剤DL 3~4kg 14-2</p> <p>■トレボン粉剤DL 3~4kg 7-3</p> <p>■エビセクトトレボン粉剤DL 3~4kg 14-3</p> <p>■MR. ジョーカー粉剤DL 3~4kg 14-2 EW 2,000倍 14-2</p>		<p>・冬期(12月~3月)及び第2回成虫 の発生期(7月)が高温、多照の年 は多発する傾向がある。</p> <p>・成虫は休耕田等の花の密を吸って、 稲に飛来し産卵する。</p> <p>・生育が遅い直播田、晩植田、多肥田 等は葉が濃緑のため加害されやすい</p> <p>・ギャング粒剤の箱施用も効果がある</p> <p>・8月中旬に全葉食害されると50%の 減収、半分が食害されると10%の被 害となる。</p> <p>・予察方法は、百日草やクローバー (誘致花)に集まる成虫を数えた り、青色またはオレンジ色粘着板の 誘引数で行う。</p> <p>・パダンバッサ粒剤で、ウンカ類との 同時防除ができる。</p> <p>・MR. ジョーカーはアブラナ科、レ タス、展葉期~落花期の梨に葉害を 生ずる。</p>

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注意事項															
イネアオムシ (7才ヒメアガ) (鱗翅目)	・イネアオムシに準ずる。		・中山間地域などで、年により多発することがある。															
コブノメイガ (鱗翅目)	<p>耕種・葉色が濃いと成虫の飛び込みが多くなる ・窒素過多を避ける。</p> <p>薬剤・幼虫の発生初期（7月中下旬、8月中～下旬）に散布する。 /10a</p> <p>ディブテックス粉剤 4kg 14-4 ディブテックス乳剤 1,000倍 14-4</p> <p>●★パダン粉剤DL 3~4kg 21-6 1kg粒剤 1kg 30-5 SG水溶剤 1,000~1,500倍 21-6</p> <p>●ランガード粉剤 3~4kg 14-3 ガードサイド粉剤 4kg 14-5 スミチオン粉剤 4kg 21-2 アルフェート粒剤 3~4kg 21-2</p> <p>★ルーバン粉剤DL、粒剤 4kg 14-4 乳剤、水和剤1000~1500倍 14-4</p> <p>■トレボン粉剤DL 4kg 7-3 EW 1,000倍 21-3 MC 1,000倍 21-3 乳剤 2,000倍 21-4</p> <p>■ミミックジョーカー粉剤DL 4kg 14-2 ■MR. ジョーカー粉剤DL 4kg 14-2 EW 2,000倍 14-2 マトリック粉剤 4kg 14-2 7077β 1,000倍 7-2</p>	<p>14-4 14-4 21-6 30-5 21-6 14-3 14-5 21-2 21-2 14-4 14-4 7-3 21-3 21-3 21-4 14-2 14-2 14-2 14-2 7-2</p>	<p>・海外からの飛来害虫である。梅雨期に飛来が多い。成虫の誘殺ピークは5月下旬、7月中旬、8月中旬、9月中旬及び10月上旬である。</p> <p>・プリンス粒剤の箱施薬により効果がある。</p> <p>・7月中下旬、8月中下旬の防除が重要である。特に、8月中下旬の発蛾最盛期1週間後か出穂期の10~15日前に防除するのが効果的である。</p> <p>・被害葉率と減収率の関係（佐賀県）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>品種</th> <th>被害葉率</th> <th>減収率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>レイウ</td> <td>10%</td> <td>2%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>30</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>ヒヨクマ</td> <td>10</td> <td>6</td> </tr> <tr> <td></td> <td>30</td> <td>17</td> </tr> </tbody> </table> <p>・経済的被害許容水準は分けつ期~出穂期被害葉率30%とされる。</p> <p>・パダンSG水溶剤は200gをペ-スト肥料に溶かし、側条施肥田植機で移植する</p> <p>・MR. ジョーカーはアブラナ科、レタス、展葉期~落花期の梨に葉害を生ずる。</p>	品種	被害葉率	減収率	レイウ	10%	2%		30	5	ヒヨクマ	10	6		30	17
品種	被害葉率	減収率																
レイウ	10%	2%																
	30	5																
ヒヨクマ	10	6																
	30	17																
イネヒメハモ グリバエ (双翅目)	<p>耕種・移植後の垂れ葉を少なくするよう健苗を育成する。</p> <p>・深植え及び移植直後の深水を避け、産卵場所をなくす。</p> <p>薬剤・育苗箱施薬（田植直前施用） /箱</p> <p>●アドバンテージ粒剤 40~60g 移植前3~0-1 ★アドマイヤー箱粒剤 50~80g 移植前2~0-3 ●オンコル粒剤5 30~60g 移植前3~0-1 カヤフォス粒剤5 50~80g 移植前3~0-1 ●ギャング粒剤 50g 移植前3~0-1 ●プリンス粒剤 50g 緑化期 ~0-1</p> <p>・成虫の産卵期と幼虫の発生初期 /10a</p> <p>アルフェート粒剤 4kg 21-2 ●ダイアジノン微粒剤F、粒剤 3~4kg 21-4 バイジット乳剤 1,000倍 30-1 ●PAP粉剤、乳剤 1,500~2,000倍 7-3 ■トレボン粉剤DL 4kg 7-3 粒剤 3kg 21-3</p>	<p>移植前3~0-1 移植前2~0-3 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前3~0-1 緑化期 ~0-1</p>	<p>・育苗末期~本田初期（6月上旬）に防除を行うが、特に本田での防除が遅れないように注意する。</p> <p>・寒冷地害虫、6月低温年に多発しやすい。</p> <p>・機械移植の場合、田植直前にパダン粒剤70~80g、サンサイド3%粒剤50~70g、ダイシストンサンサイド粒剤70~100g/箱の施用も効果がある。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>○軟弱徒長苗は、葉害が出易いので育苗箱施薬はしない。</p> </div> <p>・不耕起直播では5月中旬頃タネバエにより、籾が食害され壊滅的な被害を生ずることがある。</p>															
イネカラバエ (双翅目)	<p>耕種・抵抗性品種を栽培する。</p> <p>薬剤・傷穂被害防止</p>		・強い品種 日本晴等（穂の被害が少ない）															

病害虫名	防 除 法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
イネカラバエ (続 ぎ)	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回成虫の産卵期(7月中旬~下旬; 3回発生地帯)を中心に5~7日間隔で 2回散布する。 /10a バイジット粉剤2 3~4kg 乳剤 1,000倍 ジメトエート粒剤 2~3kg 乳剤 800~1500倍 	21-2 30-1 30-4 30-4	<ul style="list-style-type: none"> ・弱い品種 ハツシモ等 ←DCPA剤との近接散布を避ける。
イネハモグリ バエ (双翅目)	薬剤・育苗箱施薬・本田散布 <ul style="list-style-type: none"> ●オンコル粒剤5 30~60g カヤフォス粒剤5 50~80g ★●バダンSG水溶剤 1,500~3,000倍 	移植前3~0-1 移植前3~0-1 21-6	
イネドロオイ ムシ (甲虫目)	薬剤・育苗箱施薬(田植直前施用) /箱 <ul style="list-style-type: none"> ★アドマイヤー箱粒剤 50~80g 水和剤 500ml ●オンコル粒剤 30~60g ●ガゼット粒剤 40~70g カヤフォス粒剤5 50~80g サンサイド粒剤(3%) 50~70g ダイシストンサンサイド粒剤 70~100g ●テツワン粒剤 30~80g ●★バダン粒剤 50~100g ●プリンス粒剤 50g ----- ・本田散布 /10a 成虫の産卵期から幼虫孵化期 <ul style="list-style-type: none"> アドマイヤー粉剤DL 3~4kg ●オフナックバッサ粉剤DL 3~4kg サンサイド粉剤DL 3~4kg 粒剤 3~4kg 乳剤 1,000倍 ★NAC粉剤 3~4kg ●バッサ粉剤、微粒剤F 3~4kg ベストガード粉剤DL 4kg ■シクロサールU粒剤 1.5~2kg ■シクロパック粒剤 10個 ■なげ込みトレボン 4~6個 ■トレボンサーフ 200ml/10a MC 2,000倍 ■MR. ジョーカー粒剤 3kg 	移植前2~0-3 移植前2~0- 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前3~0-1 移植前 0-6 移植前 0-2 移植前1~0-1 移植前 0-5 緑化期 ~0-1 21-3 45-2 7-5 14-5 14-5 14-5 7-5 1-4 60-4 60-4 21-3 21-3 21-3 21-2	<ul style="list-style-type: none"> ・食害が著しいと、草丈、1穂粒数、 千粒重等が少なく、茎数、穂数が不 足するため被害が大きくなる。 ・要防除水準は5月下旬株当たり成虫 0.5頭とされる。6月中旬中齢幼虫 3頭/株とされる。 ・バダンSG水溶剤はペースト肥料と して側条施用する場合そのまま入れ て良く混合する。200g/10a 緑化期-6 ・低温の年は発生地域が拡大し、かつ 7月まで被害が続くので本田防除が 必要となる。 ・被害初期の防除が大切である。 ・サンサイド剤はDCPA、MCC剤 との同時、あるいは近接散布をしない。 ・バック剤は3~4日間3~5cmの湛 水状態を保つ。 ・トレボンサーフ、なげ込み剤は移植 後20日以降に使用する。
アワヨトウ (鱗翅目)	薬剤・若令幼虫期 7月下旬~8月下旬と9月 中・下旬。 <ul style="list-style-type: none"> ディブテレックス粉剤 4kg/10a 乳剤 1,000倍 	14-4 14-4	<ul style="list-style-type: none"> ・浸冠水後の水田に発生が多い。 ・常習地域では早期発見に努め、若齢 幼虫期に防除する。
イネクロカメ ムシ (半翅目)	薬剤・越冬成虫(7月上旬~中旬) /10a 若令幼虫(8月上旬~中旬) <ul style="list-style-type: none"> スミチオン粉剤3D 3~4kg 乳剤 1,000倍 ディブテレックス乳剤 500~1,000倍 バイジット乳剤 1,000倍 	14-4 21-4 14-4 30-2	<ul style="list-style-type: none"> ・毎年発生することは少ないが、年 によって思わぬ被害を受けることがあ る。 ・老齢幼虫と新成虫は薬剤の効果が低 いので注意する。 ・薬剤は落水して散布する。

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
イネカメムシ類 (続 き)	<p>薬剤・越冬成虫(7月上旬~中旬) /10a 若令幼虫(8月上旬~中旬)</p> <p>アドマイヤー粉剤DL 4kg スミチオン粉剤3 DL, 2 DL 3~4kg 乳剤 1,000倍</p> <p>★チェス水和剤 2,000倍 粉剤DL 4kg</p> <p>バイジット粉剤2 DL 3~4kg 乳剤 1,000倍</p> <p>ベストガード粉剤DL 4kg ランガード粉剤DL 3~4kg</p> <p>●PAP粉剤 3~4kg 乳剤 1,000倍</p> <p>■トレボン粉剤DL 3~4kg 乳剤、水和剤 1,000~2,000倍 MC 2,000倍</p> <p>■MR. ジョーカー粉剤DL 4kg EW 2,000倍</p> <p>耕種・休耕地、畦畔、堤、山沿い等の雑草地はカメムシの繁殖地となるので除草に努める(効果が高い)。但し、出穂直前以後の除草はかえって被害が増加する。</p> <p>薬剤・出穂始期と幼虫発生期(乳~糊熟期)に2~3回上記の薬剤を散布する。 ・特に乳熟期防除を徹底する。</p>	21-3 14-4 21-4 14-2 14-3 21-2 30-2 14-4 14-5 7-3 7-3 7-3 21-3 21-3 14-2 14-2	<p>・ホリカメムシ、クモヘリカメムシ、アカヘリカメムシ、コバシヨウカメムシ、シラホカメムシ等が寄生する。</p> <p>・アカスジカメムシは、割刈から害出、鈎合部と頂部に斑点粉集中する。</p> <p>・カメムシ類の穂加害により<u>斑点米被害</u>が発生する。</p> <p>・スミチオン乳剤はホリカメムシにやや効果が劣る。アドマイヤーはクモヘリに劣る。トレボンはシラホに劣る。MR.ジョーカーはミナアカに劣る。</p> <p>・アカヒメヘリカメムシの要防除水準は、穂揃期の20回振りすくい取り数で2.9頭。近年優先種となっているクモヘリカメムシは10~21頭。ミナミアオカメムシは5.4~6.1頭。</p> <p>・すくい取りは夕方行う。</p> <p>・出穂期のカメムシ飛来は長引くため少単位の防除では効果が不十分である。</p> <p>・出穂前後に雑草地を含めた広域防除が必要である。水田の周囲10mを余分に防除するだけでも効果がある。</p> <p>・アカスジカメムシはヒエの多発した水田では出穂前から発生がなくなる。</p> <p>・ヒエを抜かないと、水田内の雑草に寄生し、増殖する。</p>
イネゾウムシ(甲虫目)	<p>薬剤・越冬成虫被害(5~6月)と新成虫被害(8~9月)の防止を重点に薬剤を散布。</p> <p>サンサイド粉剤 3~4kg バイジット粉剤2 DL 3~4kg ■シクロサールU粒剤 1.5~2kg ■シクロバック粒剤 10個 ■トレボン粒剤 3~4kg</p> <p>・機械植の場合、田植直前にイネドロオウムシに準じて殺虫剤を箱施用。</p> <p>●ガゼット粒剤 40~70g カヤフォス粒剤5 60~80g</p>	7-5 21-2 60-4 60-4 21-3 移植前3~0-1 移植前3~0-1	<p>・新成虫は開穎もみを主体に加害し、せん孔米にする。</p> <p>・箱施用の場合広域防除を進めると効果が高い。但し、軟弱徒長苗は葉害が出やすいので使用しない。</p> <p>・粒剤、バック剤使用後3~4日間は<u>湛水状態</u>を保つ。</p>
キリウジガガンボ(双翅目)	<p>耕種・湿地に産卵が多いので苗代用地は常に排水を良くしておく。</p> <p>薬剤・播種前土壌混和又は播種発芽時に散布。</p> <p>●ダイアジノン粒剤* バイジット乳剤 1,000倍</p> <p>・湛水土壌中直播 播種直後に施用する。</p> <p>●ダイアジノン粒剤*</p>	育苗期-4 播種前-6 育苗期-4	<p>・*10a当り散布量(ダイアジノン) 3%剤 3~6kg 5%剤 3~5kg</p>

病虫害名	防 除 法	農業適正 使用基準	注 意 事 項
ユリミミズ	耕種・畑苗代、箱育苗等にする。 薬剤・荒起後3～4cm湛水し、3～4日後石灰窒素40～60kgを全面散布し、3～4日後代かきする。	植付前 播種前	・石灰窒素は、苗代を作る2週間前に施し、打ち込むと良いが、肥料設計には十分注意する。
アメリカザリガニ	薬剤・被害の多い畦畔沿いを重点に落水散布。 バイジット乳剤 1,000倍 ・荒起後3～4cm湛水し、3～4日後石灰窒素25～50kgを全面散布し、3～4日後代かきする。	21-2 植付前 播種前	・浅水管理とする。 ・湛水状態で10a当たり100ml(原液)を目安とする。
ケラ (直翅目)	耕種・畦畔間際まで湛水する。 薬剤・毒餌誘殺(土壌表面散布/10a) バダン水溶剤200gを米ぬか10kgと混ぜる ・土壌表面または作条処理施、土壌と混和する。 /10a ●ダイアジノン粒剤 5 4kg ●★バダン粉剤DL 3～6kg ●ピニフェート粉剤 4～6kg	苗代期-6 播種期-4 21-6 播種前-1	・箱育苗の場合、緑化処理前にカルボス粉剤10～20g/m ² を土壌表面散布する。 ←陸稲
スクミリングガイ (腹足綱、 柄眼目)	耕種・成貝、卵を採取し、処分する。 ・移植直後浅水管理(1cm)を行う。 ・取、排水口からの侵入防止を図る。 ・青刈水田の藁は越冬場所となるので細かく切って鍬込む。 ・多発圃場では2月以降、できるだけ細かく耕起し貝を粉碎する。 薬剤・荒起後3～4cm湛水し、3～4日後石灰窒素20～30kgを全面散布し、3～4日後代かきする。 ・10月下旬頃湛水1日後、石灰30kg/10aを13～14時に散布する(但し水温15℃以上必要)。 ・育苗箱施薬 g/箱 ●★バダン粒剤 60～100g ●★エカマート粒剤 80～100g ・水面施用 /10a ●★バダン粒剤 4kg ●★エカマート粒剤 3～4kg ★ルーバン粒剤 4kg キタジンP粒剤 3～5kg	移植前 0-5 移植前 0-1 30-6 50-2 14-4 出穂20-3	・石灰窒素はN肥料として換算すること。 ・4月下旬～5月上旬(水田では移植直前～直後)に捕獲作業を実施する また、水田の落水期以降になると水路などに集まってくるので11月下旬～4月に実施するのもよい。捕獲した貝は土中に埋没するか焼却する 捕殺する場合は必ずゴム手袋をする ・薬剤は食害防止を目的に稲の生育初期に散布する。 ・幼苗では茎葉を水面下で食害するので注意する。 ・コサギはスクミリングガイを捕食する。
イネミズゾウムシ (甲虫目)	耕種・越冬成虫の集中飛来を防ぐためできるだけ一斉に田植を行う。 ・稚苗移植は越冬成虫による被害が比較的出やすいので、中苗移植を行う。 ・水稲が根ぐされを起こすような水田においては、幼虫による根の被害が出やすい		・寒冷地ではイネの生育が遅く被害が出やすい。 ・低温多雨の時、発生が長引き、被害が大きくなりやすい。 ・本田での要防除水準の目安は5月中～下旬で成虫0.3頭/株、被害葉率

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注意事項
イネミズゾウムシ(続き)	<p>ので、深水を避け、早期中干を行って根が健全に育つよう努める。</p> <p>薬剤・機械植の場合 育苗箱施薬の効果が最も高い。 育苗箱施薬(田植直前施用) /箱</p> <p>★アドマイヤー箱粒剤 50~80g</p> <p>●ガゼット粒剤 40~70g</p> <p>●★エカマート粒剤 80~100g</p> <p>●オンコル粒剤 30~60g</p> <p>カヤフォス粒剤5 80~100g</p> <p>ガンダム粒剤 50g</p> <p>●テツワン粒剤 50g</p> <p>■トレボン粒剤 70g</p> <p>●★バダン粒剤 50~100g</p> <p>●プリンス粒剤 50g</p> <hr/> <p>・手植、湛水土壤中直播 次のいずれかの薬剤を水面施用 /10a</p> <p>●エチメトン粒剤4 4~5kg</p> <p>サンサイド粒剤 3~4kg</p> <p>●バサジット粒剤 4kg</p> <p>●★バダンバッサ粒剤 4kg</p> <p>■シクロサルU粒剤2 1.5~2kg</p> <p>■シクロパック粒剤 10個</p> <p>■トレボン粒剤 2~3kg</p> <hr/> <p>・成虫防除 飛来成虫の多いときは次の薬剤を散布 畦畔を含め一斉散布 /10a</p> <p>●オフナックバッサ粉剤DL 3~4kg</p> <p>★カルホス粉剤 3~4kg</p> <p>●スミバッサ粉剤20DL 4kg</p> <p>バイジット粉剤2DL 3~4kg</p> <p>●バイバッサ粉剤DL 3~4kg</p> <p>■トレボン粉剤DL 3~4kg</p> <p>粒剤 2~3kg</p> <p>■トレボン乳剤、水和剤 1,000~2,000倍</p> <p>サーフ 500ml</p> <p>■なげ込みトレボン 4~6個</p> <p>■MR.ジョーカー粉剤DL 4kg</p>	<p>移植前2~0-3</p> <p>移植前3~0-1</p> <p>移植前 0-2</p> <p>移植前3~0-1</p> <p>移植前3~0-1</p> <p>移植前3~0-1</p> <p>移植前1~0-1</p> <p>移植前 0-3</p> <p>移植前 0-5</p> <p>緑化期 ~0-1</p> <p>50-2</p> <p>14-5</p> <p>45-2</p> <p>30-5</p> <p>60-4</p> <p>60-4</p> <p>21-3</p> <p>45-2</p> <p>14-3</p> <p>14-4</p> <p>21-2</p> <p>21-5</p> <p>7-3</p> <p>21-3</p> <p>21-3</p> <p>21-3</p> <p>21-3</p> <p>14-3</p> <p>緑化期 ~0-1</p> <p>移植前3~0-1</p> <p>60-2</p> <p>45-2</p> <p>60-4</p> <p>14-3</p> <p>7-3</p>	<p>20%とする。</p> <p>軟弱徒長苗は薬害が出やすいので育苗箱施薬はしない。</p> <p>・代かきはいねいに行い、移植後田面(株元)が露出しないようにする(薬害防止)。</p> <p>・アドマイヤーは軟弱徒長苗、むれ苗、移植適期過ぎ苗に薬害を生ずることがある。</p> <p>・5月後半~6月前半に播種する直播栽培では稚苗が被害を受けやすい。</p> <p>・田植時期が遅くなると被害が大きくなる。</p> <p>・湛水土壤中直播場合は飛来期間が長く、発生が多くなるので、成虫飛来最盛期とその1週間後に水面施用する。</p> <p>・水面施用後は1週間くらい湛水する。なお、漏水田での施用は避ける。</p> <p>・バイジット、サンサイド混合剤はD C P A・スタムを含む除草剤との前後10日以内の近接散布をしない。</p> <p>・カルホス粉剤は夕方、浅水管理で散布する。</p> <p>・越冬成虫の防除はできるだけ浅水とし、活動が活発な夕方(日没前後)一斉に行う。</p> <p>・トレボンサーフ、なげ込み剤は移植後20日(5葉期)以降の散布とする。</p> <p>・強風下吹き寄せ、藻・浮き草浮遊田活着不良苗、軟弱徒長稲で薬害を生ずることがある。</p> <p>・6月中旬以降水田への侵入が始まる</p> <p>・7月上旬以降の密度が畦畔や農道雑草ですくい取り20回振で100頭以上(幼虫)となる場合は防除を行う。</p> <p>・育苗箱でも食害が発生することがある。</p> <p>・止葉の食害は登熟歩合、千粒重の低下を招く。</p> <p>・幼虫分散前に生息場所を中心に防除する。</p>
イナゴ類(直翅目)カネナガ	<p>耕種・畦畔雑草の草刈りを行う。</p> <p>薬剤・育苗箱施薬</p> <p>●プリンス粒剤 50g</p> <p>●ギャング粒剤 50g</p>	<p>緑化期 ~0-1</p> <p>移植前3~0-1</p>	<p>・6月中旬以降水田への侵入が始まる</p> <p>・7月上旬以降の密度が畦畔や農道雑草ですくい取り20回振で100頭以上(幼虫)となる場合は防除を行う。</p> <p>・育苗箱でも食害が発生することがある。</p> <p>・止葉の食害は登熟歩合、千粒重の低下を招く。</p> <p>・幼虫分散前に生息場所を中心に防除する。</p>
同時防除クサキリ類ササキクサキリ	<p>・6月から7月の幼虫発生期に次の薬剤を散布する。 /10a</p> <p>●オフナックバッサ乳剤 800~1,000倍</p> <p>粉剤DL 3~4kg</p> <p>■シクロパック粒剤 10個/10a</p> <p>■トレボン粉剤DL 3~4kg</p>	<p>60-2</p> <p>45-2</p> <p>60-4</p> <p>14-3</p> <p>7-3</p>	<p>・6月中旬以降水田への侵入が始まる</p> <p>・7月上旬以降の密度が畦畔や農道雑草ですくい取り20回振で100頭以上(幼虫)となる場合は防除を行う。</p> <p>・育苗箱でも食害が発生することがある。</p> <p>・止葉の食害は登熟歩合、千粒重の低下を招く。</p> <p>・幼虫分散前に生息場所を中心に防除する。</p>

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
	粒剤 2~3kg	21-3	
	乳剤、水和剤 1,000~2,000倍	21-3	
	MC 1,000倍	21-3	
	サーフ 300~500ml	21-3	
	■なげ込みトレボン 6~10個	21-2	
	■MR.ジョーカー粒剤DL 3kg	14-2	
	E W 2,000倍		

○玄米貯蔵害虫

病虫害名	防除法	農薬適正 使用基準	注 意 事 項
コクゾウムシ (甲虫類) ノシメマダラ メイガ、ナガ シンクイ、イ ッテンコクガ (鱗翅目)	薬剤・次の処理を行う。 倉庫 ・収穫調整直後、倉庫の出入り口、床、壁 面等に散布 穀物用ピレトリン粉剤 表面積10~15g/3.3m ² コクゾール 表面積 2.5~5g/m ² ・貯蔵直前に玄米に混和 コクゾール [混和处理] 玄米重量の0.1% 麦類では穀粒重量の0.1%	--- 1 害虫発生前 又は 発生初期 貯蔵直前	コクゾールの作用機作 ・物理的致死作用による殺虫効果。 ・精米するとコクゾールは除去できる ・取扱は防塵マスクを着用する。 ・倉庫内は床、壁、出入り口、ハイ表 面、下敷き材等にも散布する。 ・穀物用ピレトリンは穀物に混入しな いようにする。

○本田施用粒剤

本田施用に登録のある粒剤（混合剤のみ）一覧

薬 剤 名	使用 基 準		いもち病	紋枯病	白葉枯病	籾枯細菌病	ウンカ類	ヒメトビウンカ	セジロウンカ	ツマグロヨコバイ	ニカメイチュウ	コブノメイガ	イネツトムシ	フタオビコヤガ	イネドロオイムシ	イネゾウムシ	イネミズゾウムシ	イナゴ類	ハモグリバエ	スクミリンゴガイ	備 考
	施用量 kg/10a	施用時期 一回回数																			
アミスターオリゼーメート	3	出穂21-1	○	○																	
オリブライトパック	1(20パック)	60-1	○																		
オリゼーメートグレードM1キロ	1.3~	出穂3-4週-1	○	○																	
オリゼーメートリンパー	3~4	出穂3-4週-2	○	○																	
オリゼーメートトロボン	3~4	出穂3-4週-2	○			○	○			○	○							○			
アルフェートオリゼーメート	3~4	出穂3-4週-2	○		○			○		○	○	○									
ダイアジノンオリゼーメート	3~4	出穂3-4週-2	○		○		○			○	○	○									
ハータンオリゼーメート	3~4	出穂3-4週-2	○		○	○				○	○	○									
ハータンハッサオリゼーメート	3~4.1	出穂3-4週-2	○		○	○				○	○	○			○		○				
ハータンリンパー	3~4	30-2		○							○	○								○	
ハータンハッサ	3~4	30-5					○			○	○	○			○		○				
コトトップリンパー	3~4	出穂30~5-2	○	○																	
コトトップトロボン	3~4	出穂5-2	○				○			○											
フジトップ	3~4	出穂30~5-3	○																		
フジワンアルフェート	3~4	出穂10-1	○							○	○	○									サカメイチュウ
フジワンリンパー	3~4	30-2	○	○																	
フジワンモンカット	3~4	45-3	○	○																	
フジワンモンカットリンパー	3~4	45-2	○	○																	
フジワンダイアジノン	3~4	出穂10-3	○				○			○	○			○							トビイウカ
フジワンモンカットダイアジノン	4	45-3	○	○			○			○	○										
フジワンアプロートモンカット	3~4	45-1	○	○			○														
フジワンアプロートリンパー	3~4	30-2	○	○			○														
キタジノンPダイアジノン	3~5	出穂7-3	○				○			○	○										
キタハッサ	4~7	出穂7-3	○				○			○											
アプロートアルフェート	3~4	21-2					○			○	○	○									幼虫
アプロートダイアジノン	3~4	21-4					○			○	○	○		○						○	
アプロートハータン	3~4	30-4					○			○	○	○									
アプロートモンカット	4	45-2		○			○			○	○	○									
アプロートリンパー	3	30-2		○			○			○	○	○									
アチーブ1キロ粒剤24	1	21-3	○																		
ジョーカーリンパー	3~4	30-2		○			○			○	○										
バサジット	3~4	45-2					○			○	○				○	○	○		○		
バサジノン	3~4	21-4					○			○	○				○	○					
ミブジノン	3~4	45-3					○			○	○										
ラカートミアッシ	3~4	45-3					○			○	○				○						

※粒剤の本田施用上の注意事項

- ・散布時期を厳守しないと粒剤の特性を発揮できず十分な効果が得られない。本田では均一散布に心がける。
- ・施用前から湛水状態保ち、深さ3cm以上をたもつ。施用後少なくとも2~3日は水を落とさない。
- ・極端な漏水田、強還元田、根腐田では使用しない。
- ・薬剤吸着の多い水田では、やや多めに使用する。
- ・低温が続く、活着が遅れている場合、施用は控える。

○無人ヘリコプター散布に登録のある薬剤

薬剤名	成分(%)	作物名	適用病虫害	希釈倍数	使用基準	散布量 (/ha)
アプロードゾル	フーフロフェジソ 40	水稲	ウンカ類・ツマク・ロコハイ幼虫	16	7-1	8 ㍓
アプロードロムダンモン カットエア	テフフェノジト 7.5 フーフロフェジソ 15 フルトラール 15	水稲	紋枯病、ウンカ類、ツマク・ロコハイ、コブノメイガ、ニカメイガ	6	21-1	
オフナック FL	ヒリタフェンチオン 40	水稲	イナゴ類	8	45-2	
スミチオン乳剤	MEP50	水稲	ニカメイチュウ、カメシ類	8	21-4	
		小麦	アブラムシ類	8	7-1	
		大豆	カメシ類、ダイズサヤムシガ、シロイモジヨトウ、サヤマハエ、クキマハエ	8	21-4	
		カンキョ	ケキスイ類、コアホナメグリ、アザミウマ類	10	45-4	50 ㍓
スミチオンMC	MEP20	水稲	カメシ類	3.2~4	21-4	8 ㍓
ディテックス乳剤	DEP50	水稲	カメムシ類	5	14-4	
トレボンエア	イトフェノックス 10	水稲	ウンカ類、カメシ類、ツマク・ロコハイ、コブノメイガ、イナゴ類	8倍	14-3	
		小麦	ヒメビウカ	8	14-2	
		大豆	ハシモンヨトウ	8	14-2	
		小豆	フキノメイガ	8	14-3	16 ㍓
		しょうが	アノメイガ	8	7-3	
バッサ乳剤	BPMC50	水稲	ウンカ類・ツマク・ロコハイ	8	7-5	8 ㍓
ロムダンエア	テフフェノジト 20	水稲	コブノメイガ、ニカメイチュウ	16	21-2	
バサジノン乳剤	ダイアジノン 25 BPMC50	水稲	ツマク・ロコハイ ウンカ類	8	21-4	
ワナックハッサ乳剤	ヒリタフェンチオン 30 BPMC30	水稲	ツマク・ロコハイ、ヒメビウカ、イナゴ類	5	60-2	
スミバッサ乳剤	MEP45 BPMC30	水稲	ツマク・ロコハイ、ウンカ類、カメシ類、ニカメイチュウ	8	21-4	
ディハッサ乳剤	DEP35 BPMC30	水稲	ツマク・ロコハイ、ヒメビウカ、カメシ類	5	21-4	
マラバッサ乳剤	マラソ 30 BPMC40	水稲	ツマク・ロコハイ ウンカ類	8	7-5	
MR.シヨーカー EW	シフルオフェン 19	水稲	ツマク・ロコハイ、ウンカ類、コブノメイガ、カメシ類	16	14-2	
サトメート粒剤 20	フロパナール 20	水稲	いもち病	出穂 3~4週-2		10kg
カスミン液剤	カスガマイソ 2	水稲	いもち病	5-8	14-5	8 ㍓
コトツブ粒剤 10	ピロキロン 10	水稲	いもち病	-	出穂 30~5-3	10~15kg
同 1キロ粒剤 12	ピロキロン 12	水稲	いもち病	-	出穂 30~5-3	10kg
ビームゾル	トリクラゾール 20	水稲	いもち病	6-8	7-4	8 ㍓
ビームイトゾル	トリクラゾール 8	水稲	いもち病	5	7-4	
フジワン 1キロ粒剤	イソプロチオラン	水稲	葉いもち 穂いもち	- -	初穂 7~10-3 出穂 10~30-3	10kg
フジワン乳剤	イソプロチオラン 40	水稲	いもち病	8	14-3	8 ㍓
ラフサイトゾル	フサイト 20	水稲	いもち病	5-8	21-4	
ラフサイトフロアブル	フサイト 20	水稲	いもち病	5-8	21-4	
カスラフサイトゾル	カスガマイソフサイト	水稲	いもち病	8	21-5	

薬 剤 名	成 分(%)	作物 名	適 用 病 害 虫 又 は 雑 草	希 積 倍数	使用基準	散布量 (/ha)
ブラシンゾル	フェリムゾン、フサライド*	水稲	いもち病	8	2 1 - 2	
オリブライト1キロ粒剤	トミノロビン15	水稲	いもち病	—	初発10前~1	1 kg
ノンアラスフロアブル	トリシクラゾール フェリムジン	水稲	いもち病	8	2 1 - 2	8 l
				3 0	2 1 - 2	3 l
ハシタックゾル	メプロニル 40	水稲	紋枯病	6~8	1 4 - 3	8 l
ハリタマシエアー	ハリタマシ A5	水稲	紋枯病	8	1 4 - -	
モンカトフロアブル	フルトラニル 20	水稲	紋枯病	8	1 4 - 3	
モンカト1キロ粒剤 21	フルトラニル 21	水稲	紋枯病	—	4 5 - 2	10kg
モンガードゾル	ジクロメジン 20	水稲	紋枯病	8	1 4 - 3	8 l
モンセレンフロアブル	ペンシクロン 20	水稲	紋枯病	8-10	2 1 - 4	
カスミンハリタマシ液剤	カスカマイシ 2 ハリタマシ A4	水稲	いもち病、紋枯病	8	1 4 - 5	
カスラフトレホソゾル	エトフェンプロックス 10 カスカマイシ 1.2 フサライド* 15	水稲	いもち病、カメムシ類、ウカ類	8	2 1 - 3	
カスラフハリタマシゾル	カスカマイシ 1.2 ハリタマシ A4 フサライド* 15	水稲	いもち病、紋枯病	8	2 1 - 5	
ビームエイトトレホソゾル	エトフェンプロックス 0.2 トリシクラゾール 8	水稲	いもち病、ウカ類、カメムシ類	5	2 1 - 3	
カスラフスミゾル	MEP25 カスカマイシ フサライド*	水稲	いもち病、ヒメトビウカ、カメムシ類	4	2 1 - 4	
				150	2 1 - 4	250 l
ラフサイトトレホソフロアブル	エトフェンプロックス 10 フサライド* 20	水稲	いもち病、ヒメトビウカ、カメムシ類	8	3 0 - 3	8 l
サフサイトシヨーカーフロアブル	シラフルボン 5 フサライド* 12	水稲	いもち病、ウカ類、カメムシ類、イナゴ類	4	2 1 - 2	8 l
ビームエイトハシタックエアー	トリシクラゾール 8 メプロニル 32	水稲	いもち病、紋枯病	5	1 4 - 3	
ビームハシタックゾル	トリシクラゾール 10 メプロニル 25	水稲	いもち病、紋枯病	5	1 4 - 3	
ビームハリタマシゾル	トリシクラゾール 8 ハリタマシ A5	水稲	いもち病、紋枯病	8	2 1 - 3	
マジワントレホソ乳剤	エトフェンプロックス 6.2 イソプロチオラン 25	水稲	いもち病、ヒメトビウカ、カメムシ類、ツマクヨコバイ、イナゴ類	5	2 1 - 3	
ブラシンハリタマシゾル	ハリタマシ A5 フェリムゾン 20 フサライド* 15	水稲	いもち病、紋枯病	8	2 1 - 2	
ブラシンシヨーカーフロアブル	フェリムゾン 15 フサライド* 15 シラフルボン 9.5	水稲	いもち病、ウカ類、カメムシ類	8	2 1 - 2	

薬 剤 名	成 分(%)	作物名	適 用 病 害 虫	希 釈 倍数	使用基準	散布量 (/ha)
モンカトラフ・サイト 20フロアブル	7サイト [®] 20 フルトラニル 20	水稲	いもち病、紋枯病	6	2 1 - 3	8 ℓ
ラフ・サイト・モンカート ゾル	ジクロメジン 20 7サイト [®] 40	水稲	いもち病、紋枯病	8	2 1 - 3	
ラフ・サイト・モンカート DF	ジクロメジン 20 7サイト [®] 40	水稲	いもち病、紋枯病	16	2 1 - 3	
ラフ・サイト・バリタ [®] シ ゾル	バリタ [®] マイシ A5 7サイト [®] 20	水稲	いもち病、紋枯病	5-8	2 1 - 4	
ラフ・サイト・モンセレン フロアブル	7サイト [®] 20 ベンシクロン 10	水稲	いもち病、紋枯病	4	2 1 - 4	
ラフ・サイト・オナック フロアブル	ピリタ [®] フェンチオン 20 7サイト [®] 12	水稲	いもち病、付コ [®] 類	4	4 5 - 2	
アワード [®] フロアブル	イマゾスルフロ [®] 1.7 タイムロン 27.5 ピリタ [®] チカル [®] 12	移植 水稲	1 年生雑草、マツハ [®] イ、ホタルイ、ウリカ ワ、ミス [®] ガヤツリ、ヒルムシロ、ヘラオモ ダ [®] カ、モダ [®] カ、クログ [®] ワイ、セリ、エ ゾノサヤヌカ [®] サ、アオミト [®] ロ、藻 類による表層剥離	原液	移植直後 ～ 10 日 - 1	5 ℓ (滴下)
カシヨット [®] フロアブル	ピリタ [®] チカル [®] 12 ベンスルフロ [®] メチル 1.4	移植 水稲	1 年生雑草、マツハ [®] イ、ホタルイ、ウリカ ワ、ミス [®] ガヤツリ、ヒルムシロ、ヘラオモ ダ [®] カ、モダ [®] カ、クログ [®] ワイ、セリ、シ ズ [®] イ、エゾノサヤヌカ [®] サ、アオミト [®] ロ、藻類による表層剥離	原液	移植直後 ～ 10 日 - 1	5 ℓ (滴下)
カシヨット L [®] フロア ブル	ピリタ [®] チカル [®] 12 ベンスルフロ [®] メチル 1	移植 水稲	1 年生雑草、マツハ [®] イ、ホタルイ、ウリカ ワ、ミス [®] ガヤツリ、ヒルムシロ、モダ [®] カ、クログ [®] ワイ、セリ、コウキカ [®] ラ、ア オミト [®] ロ、藻類による表層 剥離	原液	移植直後 ～ 10 日 - 1	5 ℓ (滴下)
クサメツツ [®] フロアブル	テニルコール 5 ベンスルフロ [®] メチル 1.4	移植 水稲	1 年生雑草、マツハ [®] イ、ホタルイ、ウリカ ワ、ミス [®] ガヤツリ、ヒルムシロ、ヘラオモ ダ [®] カ、モダ [®] カ、クログ [®] ワイ、セリ、シ ズ [®] イ、エゾノサヤヌカ [®] サ、アオミト [®] ロ、藻類による表層剥離	原液	移植直後 ～ 15 日 - 1	8 ~ 10 ℓ (滴下)
クサメツツ L [®] フロア ブル	テニルコール 5 ベンスルフロ [®] メチル 1	移植 水稲	1 年生雑草、マツハ [®] イ、ホタルイ、ウリカ ワ、ミス [®] ガヤツリ、ヒルムシロ、ヘラオモ ダ [®] カ、モダ [®] カ、クログ [®] ワイ、セリ、エ ゾノサヤヌカ [®] サ、アオミト [®] ロ、藻 類による表層剥離	原液	移植直後 ～ 15 日 - 1	5 ℓ (滴下)
シーセ [®] ットフロアブル	ピリタ [®] チカル [®] 5.7 プロモ [®] チト [®] 10 ベンゾ [®] フェナ [®] ツ [®] 12	移植 水稲	1 年生雑草、マツハ [®] イ、ホタルイ、ウリカ ワ、ミス [®] ガヤツリ、ヒルムシロ、ヘラオモ ダ [®] カ	原液	移植直後 ～ 10 日 - 1	8 ~ 10 ℓ (滴 下)
キックハイ 1 [®] 粒剤	イマゾスルフロ [®] 0.9 タイムロン 15 イトベンザ [®] ニト [®] 15	湛水 直播 水稲	1 年生雑草、マツハ [®] イ、ホタルイ、ウリカ ワ、ミス [®] ガヤツリ、ヒルムシロ、ヘラオモ ダ [®] カ、セリ、アオミト [®] ロ、藻類に よる表層剥離	—	は種後 5 日 ~ 15 日 - 1	10kg
サンウェル 1 [®] 粒剤	イトベンザ [®] ニト [®] 15 ピラ [®] ツ [®] スルフロ [®] ニエチル 0.3	湛水 直播 水稲	1 年生雑草、マツハ [®] イ、ホタルイ、ウリカ ワ、ミス [®] ガヤツリ、ヒルムシロ、ヘラオモ ダ [®] カ、セリ、アオミト [®] ロ、藻類に よる表層剥離	—	は種後 5 日 ~ 15 日 - 1	

薬 剤 名	成 分(%)	作物名	適 用 病 害 虫	希 釈 倍 数	使 用 基 準	散 布 量 (/ha)
ダイオード顆粒	カフェンストール 50、 ピラゾスルフロンエチル 3.5		イゾナチアメトキサ、シズイ、ヒルムシ D	—		10kg
カルハ-粉粒剤 16	過酸化カルシウム 16 湿粉衣処理	水稻	発芽率向上 苗立歩合の安定	—	播種前浸 漬後—	90~200 kg
タカリン液剤	ヒドロキシイソキサゾール	水稻	登熟歩合向上	3	出穂直前~出穂期	8ℓ
ビビフルフロアブル	フロヘキサジオンカルシウム塩 1	水稻	節間短縮による倒伏軽減	8	出穂 10~2 日前—1	
テソロ水和剤	トリネキサホックエチル 5	水稻	節間短縮による倒伏軽減	8	4 5—1	
リゾレックスヘフランフロアブル	ミノクタジン酢酸塩 15 トルクロホスチル 25	小麦	紅色雪腐病 雪腐小粒菌核病	6	根雪—2	8ℓ
				12		16ℓ
トップジンMゾル	チオファネートメチル 40	麦類	赤かび病	4	1 4—3	8ℓ
		大豆	紫斑病	5	1 4—4	
		タマネギ	灰色腐敗病	5 16	1—3	
		水稻	いもち病、麩米(出穂期)	8	1 4—3	
		やまゆも	葉渋病、炭疽病	5	7—5	3 0ℓ
		かんきつ	貯蔵病害(青かび、緑かび、軸腐)	1 0 2 0	1—5	5 0ℓ 100ℓ
ラーベソフロアブル	チンカルクワ	大豆	ハスモンヨトウ	6		1 8ℓ
エルサンエアー	PAP50	大豆	マメシクイガ、シロイモシマダラメイガ、カメシジメ類	8	3 0—2	8ℓ
		クリ	モモコダラノメイガ	4	1 4—4	16ℓ
シマンタイン水和剤	マンセブ 75	ミカン	黒点病	5	3 0—4	40ℓ
ノモト乳剤	テラルベンスロン 5	ダイオ ン	コナガ	8	2 1—2	8ℓ
				16	2 1—2	16ℓ
		キャハ ツ	コナガ	16	7—2	16ℓ
リトシルMZ水和剤	マンセブ 55 メラキシル 10	タマネ ギ	べと病	8	7—3	16ℓ
				12		24ℓ
アルフェート粒剤	モノクロトス 5	レンコン	アブラムシ類	—	1 4—3	40~60kg
アドマイヤーフロアブル	イタクロフロイト 20	カンキツ ・ミカン	アブラムシ類	20	1 4—3	50ℓ
スミレックス水和剤	プロシミドン	カンキツ	灰色かび病	20	開花期—3	40ℓ
		タマネ ギ		16	1—5	24ℓ